

犬をギャクタイするなんて」

ママが、おこった声で言った。わざと毛をそられたと聞いて、ぼくもすぐかわいそうになってきた。

「だれがやったんだ！ ぼくなら、こんな風に犬をいじめたりしない。絶対に！」

「ほんとよね。動物ギャクタイ、反対！」

ぼくとママはもり上がり、犬を助け出すと家に連れて帰った。そしてそのままこの犬は、うちの犬になったんだ。名前はぼくがつけた。松の木にしばられてたから、『松ノ助』だ。

思いもかけず、犬を飼うことになって、ぼくはかなりうれしかった。実はずっと前から犬が欲しかったんだ。犬ってかしこいんだよ。前にテレビで見た犬なんて、ケータイが鳴ると持ってくるし、メモをくわえてお使いにも行けるんだ。松ノ助だって、きっとそういうことができるようになるよね。

なんたって松ノ助は、ぼくに助けられたんだから。ぼくの言うことなら、何でも聞くにちがいない……なんて思っていたけど、あまかった。松ノ助は、とんでもない恩知らずだった。その上、頭も悪かった。もひとつ言うと、いじきたないやつだった。

初めて散歩に連れて行った日、松ノ助はブヒブヒ言いな

がら、ぼくをひっぱって先に歩いた。

「待って！ そんなに引っぱっちゃダメ」

って、言っても聞きやしない。ぐいぐいひっぱって公園に来ると、松ノ助ははえてる雑草を、かたっぱしから食べ出した。犬って草も食べるんだっけ？ さんざん食べてゲップをしているのを連れて帰り、玄関で足をふいてやろうとしたら、松ノ助は急に「オエー」とはいた。さっき食べてた緑の草が、ぼくの足にドロ〜とかかった。

「ギャーッ、なにすんだよーッ！」

これが、恩知らずのはじまりだった。

草を食べすぎてゲロをはくくらいだから、松ノ助は家にあるものを何でも食べた。うっかりテーブルにのせておいた料理はもちろん、かごに入れてあった生じゃがいも、はち植えのランの花、ぼくの消しゴム、ママの指輪。みんな食った。そしてカーペットの上にモリモリッとウンチをし、足をあげてシャアアッと壁におしっこをかけた。

「松ノ助、ほら、あんたのトイレはここっ」

ママが置いた、犬トイレは無視。リビングの白いカーペットに点々と茶色いシミがつき、玄関のドアをあけるとモアットとおしっこのおいが立ちこめた。

「これじゃあ、松ノ助のトイレで、くらしてるみたいだ」

とパパはなげき、ママはついに松ノ助を家から出して、庭で飼うことにした。そしたら、今まで「ブヒッ」としか鳴